



育てることと育てられること

部長 大塚 俊明

新年度が始まり、早くも一か月が経とうとしています。つい先日まで満開を誇っていた初等部の桜も、今では若葉が芽吹き、そのみずみずしい緑が私たちの目をやさしく癒してくれています。

新しく迎えた一年生も、その若葉のように少しずつ環境に慣れながら、それぞれのペースで新しい毎日を歩み始めています。初めてのことに戸惑いや不安を感じる場面もあるかと思いますが、日々の小さな経験を一つひとつ積み重ねる中で、確かな成長が育まれていくことを願っているところです。



一年生がいち早く学校生活に適應できている背景には、何といたっても六年生による温かな「お世話」があげられます。登校後の着替えや学習の準備、休み時間や清掃の時間など、さまざまな場面で六年生は大活躍しています。六年生の丁寧で思いやりのある接し方が一年生に大きな安心感を与えていることは、多くの場面から実感されます。

一方で、この関わりは六年生自身にとっても大きな成長の機会となっています。一年生や教職員から感謝される経験は、自分の存在が誰かの役に立っているという実感を生み、承認の場としても機能します。世話をしているつもりが、ふと気がつくとも一年生の素直な姿に癒されている——そんな感覚を抱いている児童も少なくないのではないのでしょうか。

「ケアすることは同時にケアされること」と言います。これは、誰かを思いやる行為が巡り巡って自分自身の心も支えてくれるという考え方です。たとえば、疲れている友人に「大丈夫？」と声をかけたり、少し話を聞いてあげたりしたとき、相手がほっとした表情を見せることがあります。その瞬間、こちらも安心したり、温かい気持ちになったりします。こうしたやり取りの積み重ねの中で、人と人との間には自然と支え合いの循環が生まれていきます。また、誰かの役に立てたという実感は、自分自身の存在を肯定する感覚にもつながり、内面から心を整えてくれる働きもあります。

「教える」「教えられる」という関係においても、同じことが言えます。私たち教員は日々子どもたちへの教育活動に当たっており、それは普通「教える」という一方向的な行為として捉えられています。しかし、子どもを教え評価する営みは、同時に自分の指導が子どもたちにとって適切であったのかを問い返される機会でもあります。私たちは、授業を通して子どもたちを「育てる」と同時に子どもたちに「育てられる」という関係にあると言えます。

「教えたのにできない」という言葉は、教師に限らず大人が子どもに投げかけがちな表現ですが、その裏には「この教え方は本当に適切であったのか」という問いが常に伴っています。「ケア」という観点に限らず、このような意味においても、「育てること」と「育てられること」は常に一体であり、切り離すことのできない関係にあるのです。

風薫る五月を迎えます。五月には、子どもたちが心待ちにしている運動会が控えています。運動会は、子どもたちの自主性や協働性が十分に発揮される絶好の機会です。一人ひとりが自分の力を発揮しながら、さらに自分を磨き上げ、大きく成長してくれることを期待しています。

5月もどうぞよろしくお願いたします。